

〔OAP要旨〕

テリパラチド使用は、骨癒合不全因子を伴った
腰椎後側方固定の骨癒合を促進する：1例報告

乗本 将輝 大鳥 精司 江口 和 井上 玄
折田 純久 山内 かづ代 青木 保親 中村 順一
石川 哲大 宮城 正行 鴨田 博人 鈴木 都
久保田 剛 佐久間 詳浩 及川 泰宏 稲毛 一秀
西能 健 佐藤 淳 豊根 知明 高橋 和久

(2013年12月27日受付, 2014年1月31日受理)

【はじめに】副甲状腺ホルモン（PTH）製剤の間欠的投与により骨粗鬆症性椎体骨折のリスクが減少する事が報告されている。前臨床データでは、腰椎固定術におけるPTH製剤の有効性が指摘されている。しかしながら、腰椎固定術におけるPTH製剤の有効性に関する臨床データはほとんど存在しない。

【対象】局所骨を用いた後側方固定を行った67歳女性、既往に骨粗鬆症・関節リウマチ・糖尿病という骨癒合不全因子があった。血液データでは骨吸収マーカーが高値を呈していた。患者は1年の間に初回および2回の追加手術を受けていた。初回手術ではペディクルスクリュー・局所骨を用いた後側方除圧固定術であった。2回目および3回目の手術は、それぞれ近位および遠位隣接椎間障害のために行われた。骨癒合を促進するため、テリパラチド連日皮下投与製剤を用いた。

【結果】腰痛・下肢痛は最終手術後に改善した。固定高位はT9から腸骨であった。腰部後側方に大きな骨癒合塊を認めた。

【考察】局所骨を用いた腰椎後側方固定術後、骨癒合の得られないリスクの高い症例において、テリパラチド連日皮下投与製剤は有効であった。

Key words: Teriparatide, posterolateral fusion, lumbar, local bone, osteoporosis